

まぼろし

文と絵

柴岡治子

こわいことを覚えています。こわかったお話を子どものみなさんにしてもいいのかな。

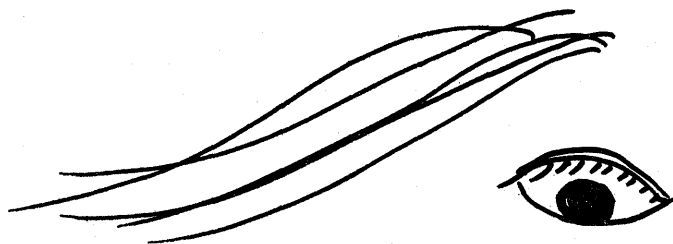
幼稚園の頃、おばさんのお家の裏の川のむこうの家で、けんかをして人を殺したという事件が起きました。

まだ新聞もよめなかったし、くわしいことはわからなかったのですが、どうも庖丁を使ったらしいことは周囲の人たちの話でわかりました。

それからおばさんの頭の中で、暗い闇の中をデバ庖丁が二つ、人はだあれもないのに、チャツ、チャツとけんかをしているまぼろしがやきついてしまいました。

幼稚園に行くのも何だかこわくて、朝いつまでも玄関の敷台の上に、頭を下げてしゃがんでいた記憶があります。

そして少しの間、幼稚園をお休みしていたのは、きつとそのことと関係があったのでしょうか。



七

おぼさんは幼稚園の時、妖精の出て来るお話、万聖節のおぼけのあつまりのお話など沢山ききました。ちっともこわくはありませんでした。みんな仲よしのお友だちみたい。

だけど黒い闇の中のデバ庖丁のけんかは、今でもそのまほろしが頭の中に浮かぶとハッとします。

こんな思い出はない方がいいですね。ない方がいいと思いつながらこんなこと書いてごめん。

だけでもしあったとしても、自分の心の中にそんなこわいことをする気持ちがあれば、こわがったりしなくてもよいのだと思います。

おぼさんはいつもそう思って、こわいまほろしに幕を下ろすことにしています。

筆者柴岡治子さんは、戦後よりインテリア・デザイナーとして活躍されている方です。

現在、御自身で室内装飾された東京・赤坂のマンションに一人住まい。若い友人たちのたまり場になっているのが、また楽しそうです。

編集部